

奄美諸島における保全上重要な亜熱帯照葉樹林の指標候補としての大径木

Large-diameter trees as a potential indicator of a subtropical evergreen broadleaf forest of high conservation value on Amami Oshima Island

著者：松本斉・大谷雅人・鷺谷いづみ

雑誌の情報：保全生態学研究、20巻2号、147-157、2015年



大谷雅人

■ 論文の内容

奄美大島には多くの固有種や希少種が分布しており、国立公園の指定が検討されています。しかし、同島の照葉樹林は広大で地形も複雑なうえ、危険なハブも生息しており、広範な調査は簡単ではありません。そこで私たちは、同島中部の金作原国有林にて調査を行い、過去50年間皆伐されていない林分では（１）そうでない林分に比べて林冠木の直径の平均値が大きいこと、（２）林冠木の直径の平均値が大きいほど林分内の樹洞数、倒木数、着生植物の種数が多くなることなどを明らかにしました。大径木は、長期間にわたり大規模なかく乱を逃れ、樹洞や倒木など多様な生物が利用可能なマイクロハビタットに富む森林の指標として有効と考えられます。

■ 研究員から一言！

現在、空中写真から木の1本1本の樹冠の大きさ、すなわち太さを推定する方法を開発中です。実用化されれば、保全上重要な森林をより効率的に探せるようになるでしょう。